

一葉恋慕（二）

多谷昇太

「いや……わかりました」と一言云ったあと私は立ち上がって一葉の目をじつとのぞきこんだ。そしてそこに宿る一人ぼっちの寂しさと悲しさを正しく理解する。人に理解されず、のみならず自分にさえ拒否されるといふ辛さは、つとにこの私に於いて顕著なことだったからだ。前記したことだが、私にとつてどれほど無法で、一方的な迫害と生活妨害を被った結果だとしても、一度ホームレスや車上生活者に落ちてしまえば世間は誰も相手にしないし、十把一絡げでブータローとしか見ない。更にこちらは眼前の一葉とはまったく異なるが、斯く不本意で不如意をきわめる境遇に落ちてしまうと、私は自律心や克己心というものを、すなわちそこから抜け出すための気概となるものをほとんど失くしてしまう。自暴自棄になつて大量の喫煙や無為徒食等の悪癖に悉くはまつてしまふのだ。そしてその挙句こんどは自分で自分を蔑み突き放してしまうこととなる。畢竟他人からも自分からも蔑まれ虐げられる存在となつてしまふのだが、しかし思うにこれほどみじめでなさけ

ないなものはない。この弾効心に充ちた、無慈悲な（あるいは立派な？）世間やいま一人の私への抵抗など私にはもうとつくにできなくなつていたが、しかしこの一葉は違つていた。世に人に「抗うのだ」といま先の耳ではつきりと聞いたばかりだ。しかしではなぜ、彼女はますますこのように、自他に負け続けるなさない私風情同様に、強くうつつ屈し悲惨なのか。それは云わずもがな、世間にあがらうとしておきながらその実その世間におもねり、助けを求めるがごとく人の妾にならうとしているからだった。彼女の小説「闇夜」の主人公お蘭様が、仇、波崎におもねつて、その女になるがごときもの、耐えられるレベルを超えていた。それゆえ自分で自分を許せず怒りに沈み、うつつ屈して、それをはからずも私にぶつけて来たのである。しかし彼女に於けるこのうつつ積が、ただ単にそのことだけによるのではないことも私にはわかつていた。柄にもなく男気を示そうと思つたがゆえだろうか、あるいはこの超常的な時空の中にあればこそ、目には見えないどなたかの助力を受けましたものだろうか、彼女のうつつ屈のからくりが手に取るように、いまの私にはわかるのだった。それによれば、であるが、彼女における

、お蝶の存在は本物だった。世の意向、あるいは男の意向に立脚したもので、更々なく、もともと彼女の内にあった、生来彼女が育んできたお蝶そのものが作品に現れたというのが正解だった。地位・名誉・金などになびきがちな世の姿に与しない、しかしその出処まではわからない自律心のようなものが彼女の内に元々あって、なるほどそれに樋口家没落以前の「銭金はいやしきもの」とする訓導をお嬢様時代に受けもして、斯くお蝶として結実したものだ。それをひねくれ根性で勘繰って、世の意向に沿うもの、などとした私の指摘は彼女にとつてどれほどくやしきものだったろうか。こう考えていただきたい。小説「うもれ木」に於ける兄入江籟三を彼女の内の本地、すなわち銭金や権力になびかぬ、謂わば真善美こそとする境涯にそのまま置きかえてもらいたいのだ。すればいまの一葉の立場は自明であろう。確かに彼女はいま兄入江籟三のために妾になるのだ。自分のためではない。しかし斯く云う私が見取った彼女に於ける理を世間はそうとは見まい。いや見れまい。単にやはり「自分のため」か、あるいは「生活に負けて」妾になるのだとぐらひにしか見ないだろう。しかしいずれにせよ、それへの

くやしさと、またどうしても自分で自分をあざむくような、単に自らに詭弁を弄しているだけとも見てしまふ、そのくやしきもあいまって、彼女はますますも堪えがたいのだった。そのうつ屈のからくりが、他ならぬそのいとしいお蝶を前にすれば、私には実によくわかるということだ。

と、このとき目には見えないが我々二人のかたわらで何の為にか、いや誰の為にだろうか、人が泣いているような、何某か波動のようなものが伝わって来た。何とはなく私は、もし今この彼女の姿を彼女の父上、今は亡き樋口正義氏が見るならば、いったいどう思われるだろうかとふと思つたのだった。愛する妻を、また愛娘二人を、彼は心ならずも事業の失敗ゆえの貧窮の中に残して行かなければならなかった。はたしてそれはどれほど無念だったろうか。

そして生計の煩わしさなど考えさせもしなかつた、箱入り娘として人一倍可愛がっていた娘夏子（一葉の本名）の、今の生き行く苦勞を見るならば、こちらもまた万端遣るかたあるまいと思われた。そのように想像するうちに突然胸がいつぱいになり、はからずも私の目に涙がにじみ出た。するとそれに呼応するかのよう私を睨視していた一葉の目付きが

変わり、そこにも切なげな、しかし愛しげでもある涙が浮かびあがる。一步、二歩と私の方へ歩みかけたが逡巡して止まった。しかし『いいんだ。みんなわかっているよ。すべて許している』とでも云うような想念が私のうちに湧き起こって来、一葉に向かつて私は鷹揚にうなずいていた。その途端「お父っあん！」と一言叫んで彼女は私の胸に飛び込んで来、そのまま堰を切ったように泣き出した。その背に手をまわして私は彼女を慰めるのだが「すまない、すまない」と侘び続ける声を、どこか胸の内でも聞きながらのことであつた……。

しかしこの時通りをはさんだ公園の向こう側に人が立つのが見えた。歩行者用の信号ボタンを押したようだ。信号が変われば公園に入つて来るにちがいない。しまった、どうしよう、いや（この奇跡の邂逅は）、どうなるのだろうと危惧した途端、一葉が我に返つたように私の手から離れ、恥ずかしげに目を手でぬぐつた。私はポケットからハンカチを取り出して一葉にわたす。幸いなことに公園に入る前偶然にも辛シヨップで買ったばかりのもので一度も使っていない。一葉はそれをしばし目にあてたあと「どうも、あいすみません。はしたない真似をしてしま

つて。どういうわけかあなたに父の面影を見てしまひ……ほほほ、大人げない女とお笑ください」と云つて謝つた。「いや、とんでもない」と大仰に云いながらしかし私は彼女の肩越しに、信号が変わつてこちらに来ようとしている老人を見ていた。おおかた近所に住む老人の夜の散歩でもあるうが出来れば私はこちらに来てほしくなかつた。距離があつて見えまいが私はすわつた目付きをして老人をにらみつける。それが効いたのかあるいは私の仕草におかしなものを感じたかして、彼は公園を巡る側道へと進路を逸れてくれた。もし、である。一葉の姿が私だけに見えて余人には見えないものならば、人を抱くような、あるいは透明人間にハンカチを手渡すような仕草はきつと不気味に思えたのにちがいない。しかしもしそれならハンカチは宙に浮かんで見えたのだろうか？もつとも暗くて見えなかつたのかも知れない。とにかくまわした手の平には一葉の熱い血潮が、慟哭する身体のふるえが間違ひなく伝わつて来たのだ。ゆめ、霞まぼろしの類とは思えなかつた。

いたわるように私は奇跡の人に言葉をつなぐ。「あなたのお父上が……と直前に伝わつて来た彼女の父上の想念の不思議を云いかけて、その実「いや、あ

りがとうございました」と云って深々と頭をさげていた。その思いが一番強かったからだ。「あなたの偽りのない姿を見せていただいて、本当に感激しております。もうひさしく私は、このような体験はしておりません（どころか、マジで始めてだった）。あなたの涙に裸がれたような気さえしております」と正直にいまの気持ち伝える。今まさに共有が、彼女との一体がなされたような気もする。このままじつと見つめ合っているだけで充分な気がした。一葉の私への眼差しにも何か境が取れたような、親近の度合いが深まったような色があった。「いいえ、こちらこそかたじけのうございました。胸の奥まで察していただいた心持ちがして……あの、ほほほ、気が晴れました」と云ってくれたのだが、しかしこの時迂回して来たさきほどの老人が側道の茂みからいきなり現れて「プータロー」と一言小声で罵り、そのまま公園の奥の方へと離れて行った。更にそれに合わせたわけでもあるまいが今度は木立の向こう、周囲する車道の方からこちらは大声で「プータロー」「プータロー!」「プータロー!」と男、女、男の順で若い男女の罵る声でした。すでに耳タコになっていた件のストーリーカードも、偏執狂の親分の使い奴どもとすぐ

知れた。暴走族あがり（もしくは現役?）の彼らは楽しむがごとく車で私を追いかけて来ては罵り、車中で私が寝込めばまたぞろエルム街のフレディをやらかすのだった。どこへ逃げてでも神出鬼没のように現れるのは霊視女というナビゲーターを備えているからである。彼のオウム真理教の、あるいは（文字通り）ヤクザの街頭宣伝カーのように、彼らのビクティムに摺り込みをするがごとく、何回でも「プータロー」を連呼してみせる。こちらの神経をまいらせようとしても云うのだからそのしつこさに限りはなかった。こいつらに限らずいまの、いじめ世のトレンドなのだとも思う。とにかくそいつらがまたぞろ現れた。一番現れてほしくない、いま、この時に。

私の顔色がくもり木立の向こうを気にするのを見て一葉もそちらを見やつた。「これはしたり。わたくしのことばかり申しあげてしまい、あなたのことをお聞きするのを失念してしまいました。都の花を読まれたとか……これは私の勘なのですが、ひよつとしてあなたも文芸か何かをなさるのではありませんか?やはり小説か、あるいは和歌?……か」と、私の心に感応してそこを探るように、私の顔をまじまじと見ながら、また小首を愛らしくかしげながらそう聞いて

くれるのだった。悪ガキどもを気にする私の仕事を誤解してのことだったがしかしこの質問には驚かさされた。そもそも出現自体が極限の驚きなのだが、なぜそんなことまで判るのか、こちらの方もびっくり以外のなにものでもない。なぜなら確かに私も一葉が云い当てた通り文芸を致す身だったからである。

それも御指摘の通り小説と和歌を、さらには詩とシナリオまで手を広げていた。しかしとは云つてもいづれも一人でシコシコ書いているだけの、プロでもなんでもない身だった。にも拘わらずこの私の書くもの、その内容が件の偏執狂には抑々お気に召さないらしい。私は世の格差、富や権力の集中と、それも極めてその横暴を描くのに意を使っていたのである。米国の9・11やロシアに於けるモスクワのアパートの、それぞれ自国政府による爆破や、ジャーナリストのマリア・ポリスカヤさんの殺害に憤慨し、シリアでアサドの親衛隊によって殺された日本のフリージャーナリスト、山本美加さんなどの存在が哀れでならなかった。もちろん抑々私に於いてはこの身で差別や生活妨害を味わい尽くし、すればその迫害の基となるものへの追及をおさおさ怠ることはなかったのだ。蓋しこの奇跡の邂逅もひよっとしてそ

れが媒介……?とも思うがしかしそれは確かめようもない。何にしても学歴も身分も、また金もないおまえ(つまり私)などが世に書を問うことなど許さない、とするその存在が逆に私を鼓舞していたのだった。それはちょうど「俺たちと同じ長屋に住む者が小説など書きやがって」とし、また「御足様の吉原の悪口を書きやがって」などと誹謗中傷したという、眼前の一葉への嘗ての町衆の反発に、彼女がめげなかったのとまったく同じことである。ただし、実際に世に書を為した一葉と違つて私にはそれがなかったし、この先も終生ありそうもない。ではなぜ、件の親分や手下どもが斯くも目くじらを立て、また抑々私が小説を書いていることを、それも何を書いているのかまでわかるのだろうか?もちろんそれは霊視である。取り巻きの霊視女たちが知らせているのだから、しかしそれにつけてもこれは、つまり霊視とは、いったい何なのか?と思はざるを得ない。いっさい知識を持たないが、しかし斯くもその禍を受ける身であれば常にこれを思わぬことはない。おそらく:憑依と似たものではあるまいか?彼ら霊視者たちがこちらを霊視するとはつまりこちらの、憑かれる者自身の目を通して見ているような気がして

ならない。しかしもしそうであるならば、これは別の意味で思うところ少なからず、とせざるを得なかった。なぜなら彼らに容易に心の波長を合わせられる程度の私の心根でしかない、ということになつてしまふからだ。単に身の不徳ということでも済ませられる話ではなかった。またプロでもなんでもない私になぜ? の方はこれは皆目わからなかった。発表できなければ日記と同じようなものだから目くじら立てる必要はないと思うのだが……。

そんな私の患いまで知ってか知らずか眼前の一葉が私に顔をほころばせて見せてくれる。私の喜びを共有してくれるようなその笑みに、道路側にいるヤクザどもの存在を忘れて、私の顔はだらしなく崩れてしまふ。この一葉と、文学を語れることほど私にとつて嬉しいことはまたとないのだ。それこそ夜が更けるまで語り合っていたい。目は口ほどにと云うが、そう口にはせざとも私の目がそれを彼女に語っていることだろう。更になお嬉しいことにはその一葉自身も、表情も「ではどうぞ、語り合いましょう」と云つてくれていながらごとしなのである。それはちようどこの出会いの当初から私が欲していた、図っていた、共有を、彼女もしたがっているとも取

れるのだった。もしそうなら、これほどの果報があるのか……。

しかしとは云うものの、実のところ本当にどうなっているのだろうか? この出会いの筋書きと顛末のほどは(もしあれば、の話だが)。そして彼女の心の内は。斯く云うわけは始めの邂逅以来ただの一度でもこの超常状態、すなわち本郷から大森への一瞬の内の移動を、その真偽のほどを、確かめたいとか、早く家に戻りたいとかのことを彼女はいつさい口にしていないのだ。いったい何故なのか? 聞きたくもあつたがしかしそれも出来ずにいた。この奇跡の演出家に対してそれは背任行為にあたると思うからだ。だがそれにしても老婆心を起こさざるを得ない。母上のお滝さん、妹の邦子さんは今頃どうしておられるのか。心配してはいはしまいかなどつい思つてしまふ。それを云おうか、もし失念しているのなら気づかせてあげようか……実に悩ましいところだった。ただ、こちらにも不思議なのだがひよつとして一葉がこちらの世界に、すなわち彼女の時代から数えて百八年後のこの現代社会に、このまま止まつてしまふのではないかと心配する気は全然起きなかつたのだ。なぜかそれは決してあり得ない気がする。何かの気

ひとつで、例えば今にでも彼女はすつと消えて、帰ってしまうことだろう。不思議と確信があるのだった。とにかくそんなことを私が気に病んでいるうちにも、彼女は最前の笑みをたもったまま、なんとこう申し出てくれた。「もしそうでしたら（私が文芸を、和歌や小説をするならばということだ）、いかがですか？ さきほどのお礼代わりに相聞でも致したいのですが。自分のことを胸の奥まで判ってもらえることほど嬉しいことはありません。ほんの少しでもお返しして差し上げたい。しかしとは云つても、若輩の私の身ではあなたのことを聞く術もありません。もし和歌でもお詠みいただけれるなら、あなたのことを少しでもわかつてあげられる気がするのです。御存知かどうか…僭越ながら私も歌塾で師範代をしている身ですので…さあ、何とでござんす？ ほほほ」。名作「たけくらべ」の中の、みどりが信如へ心中で迫る折りの名決めゼリフまで使っていたいだいたりして、まあ、それこそ本当に、何と、いうことを思いつく人なのだろう。御存知も何も、小説はもとより、私が見たからなのだ。今でも相当数の彼女の和歌を諳んじている。まさに師匠と思うその人と相聞歌を為

すなど…それこそ至福の至りなのだが、しかし「はたやはた」でもある。名人と下素人が将棋を指すようなものだからだ。痛し痒しなのだが、しかしここはもう清水の舞台からと思つてやるほかはない。意を決めて「いや、光栄です。私はいままであなたの和歌を手本にしてやつて来た者ですから…その師匠に私こそ大僭越なのですが…」と云つて暫し黙考し、どうか一首をひねり出した。彼女が余所衣を脱いでくれたことに感謝しつつ、その誘いとなつてくれたものをこそ、私はこう詠んだのだ。「をのこやも我（わが）泣きごとを云ひもぞするもばら受けなむ尚泣けよかし、君」と。一葉はその拙歌をはつきりと聞き取り、やおらそれを声に出しては繰り返し、続いてこう受けてくれた。「泣けばこそかかる清（すが）しき思ひすれをのこの胸はありがたきかな」。それを聞いていやこそばゆいこと、そうでないこと。嬉しさ余つてそれこそ本当に清水の舞台から飛び降りてしまいたい気持ちにもなる。これ以上云つても仕方ないから云わないが、私にとつてこれ以上はないシチュエーションでの、これ以上はない果報なのである。一葉がこの私を、世になさげなさをきる私を、

、男、として認めてくれたのだった。この嬉しさを
お察しいただきたい…。

私の喜ぶ様子をともに喜んでくれるような表情を
して一葉は「まあ、気丈なお方ですこと。まさしく
士（おのこ）を見ます、あなたに、はい。ほほほ。

これではあなたのことを判ることはなりません、
しかしあるいは一番わかったのやも知れません。あ
なたの身分や地位がどういとお方であれ、いまのお
歌に一番あなたが出ているのでしよう。堪能、致し
ました」と云ってくれた。これに対して何をか云わ
む、また云うべしや。先程もそうだが思い余ってた
だ一言を返すばかりである。「いや、ありがとうございます
いました。師匠に褒めていただいて、こんなに嬉し
いことはありません」と。

この親和力の至りを見届けたかのように私の胸に
帰還を伝え来るものがあつた。もちろん彼女樋口一
葉の帰還をである。何と云うか、伸びきったゴムひ
もの限界を伝えるような、それが元の適宜な場所に
戻るのを促すような感覚で、自然からの促しのよう
な感覚である。時空を越えてまで無理をして伸びて
くれた一葉に、またそれを為さしめてくれた存在に、
感謝の思いつばいに私はそれに従つた。一葉を彼

女の本来の世界にエスコートしなければならぬ。

私は自然のうちに彼女の手を取つてこう云つた。「と
ころで、さあ、もう帰りましょう、本郷へ。お母様
と邦子さんが待つている、あなたの良きお友だちた
ちが皆待つている世界へ。私のご案内します」と促
したのでつた。これに何の疑問も言葉も差し挟むこ
となく一葉は私に手を預けたまま私と歩を進め始め
た。林の一角に何かオーラのような暖かいものを感
じる。時空の割れ目とすぐに悟つた。もうすぐ、一
葉はいなくなる。このやわらかな、温かい手を、そ
の感触を私はいつまでも覚えていよう。ありがとうございます
ございました…。

このまま、豊穣の感覚のままに居れるような塵の
世ならば私も一葉も苦勞はしない。至福の、一番大
事な今のこの瞬間でさえ、世の澀と軋轢は容赦なく
襲い来る。「このプーターロー！」と大声で罵つたあと
悪ガキどもが爆音を轟かせながら公園の周囲を車で
まわりはじめた。一瞬間をしかめてそれを目で追う
私に一葉が「こうしてあなたに身を寄せていると温
かい。冬なのに身が火照つて夏のようにです、ほほほ。
そう云えば林の向う側に何か蛍のような光が舞つて
いるのが見えます」。「え？ 蛍？」と思わず聞き返す。

ああ、そうか、悪ガキの車や他の車群が一葉にはそう見えるのかと合点する。「ええ、螢が。それで思い出しましたが、先程の、尚泣け、とおっしゃるなら、私は世の無体と無明を云うよりは、自らのそれを泣きたい気がします。私にはまだ何も見えない、私の目をふさいで、すべてを邪魔しているものの正体が。歌にすれば、思はめやまとの螢の光なきしみのすみかとなさんものは、とでもなりましようか、ほほほ。いまだすべてが暗うございます：」。

確かにそうだ。世が人がというよりは自分の無明こそが自分を更生させず、闇に引き止めているのかも知れない。一葉に負けぬいまのこの不遇を「どうしようか」ではなく、ひたすら自分は「どうあるべきか」を探り、そして「大事なものは何であったか」を求め続けることが肝要なのだろう。しかし云うは易しである。今晚これからも、また私のこれからの人生も、それぞれ闇はなお深くなるのだろう。一葉同様光はまだいっかな見えぬ：。

いつの日か彼女とまたこうして人生や文学を語り合えるだろうか。時空の隙間に入る直前一葉が私の肩に頭をあずけてくれた。恋しい。いと恋しい。こ

の人こそが。まさに一葉恋慕である。その一葉がいま、消えた：。

(一葉恋慕、一応、完)

—小説返歌—

世が人がとありかかりとひたみちに云ふが空しさ己心の魔ななり

花と咲きお蝶呼びたし我妹子をうもれ木ままでは果さざるらん

※「一葉恋慕」は一応ここで終えます。新たな着想が湧き次第また続編としますので、乞う御期待。

